

着物

2005(平成17年)

MIYUKI-kimono 着付け教室

着物

頁

【着物の名称・寸法】

着物の図	1
------------	---

【浴衣】

由来	2
帯・種類	3

【着物と帯の組み合わせ】

一覧	4
留袖・訪問着	5
付け下げ・色無地・小紋・紬	6

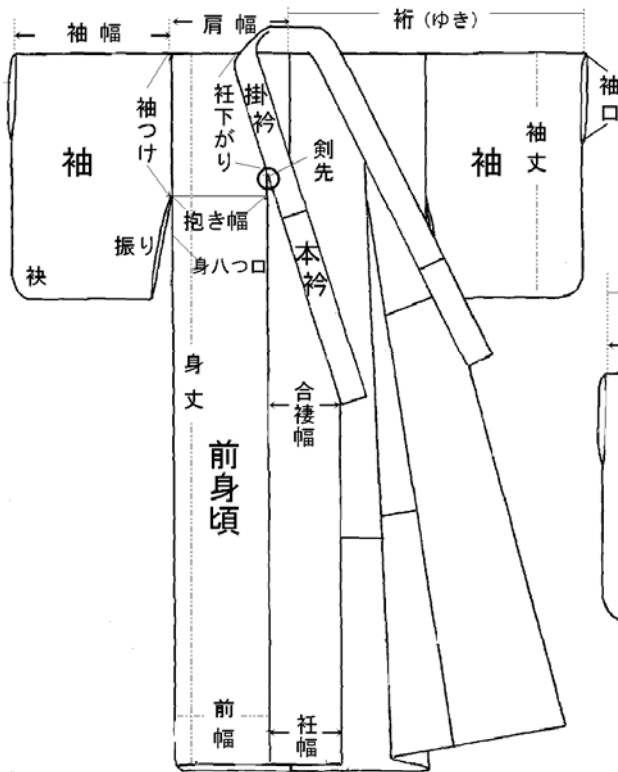
【半衿の付け方】

半衿の付け方	7
準備	8
半衿にまち針を打つ	9
襦袢（内側）にまち針を打つ	10
襦袢（内側）に半衿を合わせる	11
襦袢（内側）に半衿を縫い付ける	15
襦袢（外側）に半衿を合わせる	16
襦袢（外側）に半衿を縫い付け、仕上げ	19

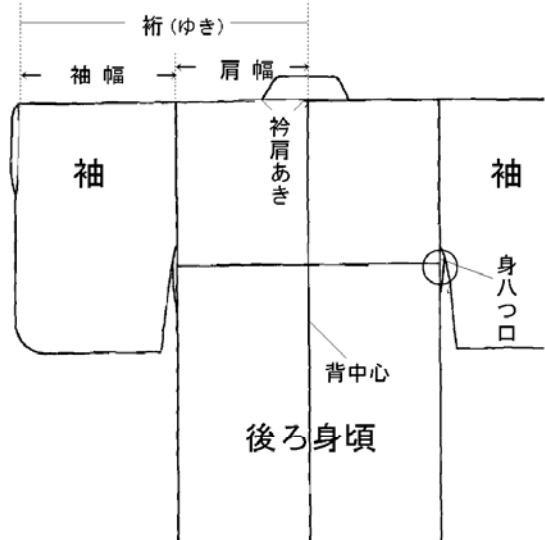
MIYUKI-kimono 着付け教室

電話問い合わせ

フリーダイヤル ☎ 0120-25-4677



着物の名称



標準寸法

袖口	6寸	23cm
袖丈	1尺3寸~1尺3寸5分	49cm
袖つけ	5寸5分~6寸	23cm
袖幅	8寸5分	32cm
肩幅	8寸~8寸5分	30cm~32cm
衿	1尺6寸5分~1尺7寸	62cm~64cm
身八つ口	3寸5分	13cm
お衿下り	6寸	23cm

衿幅	4寸	15cm
前幅	6寸	23cm
後幅	8寸	30cm
抱き幅	剣先~袖つけ	
本衿	広衿幅 11cm	
合襦幅	衿幅-1センチ	
衿下	別名 立襦	
身丈	肩山~裾(身長+10cm)	
繰越	5分~8分	

浴衣

浴衣の由来

浴衣とは、もともとは、お風呂に入る時に着ていたものです。

昔のお風呂は、今の様に湯船につかる入浴法ではなく、蒸し風呂で、浴室を温めて、垢を浮かせ掻き落とし、かけ湯をして流すと言う入浴法だったそうです。

その為、汗をかきやすくする為、また、そのように入浴が出来たのは、やはり身分の高い方々だったようですし、その当時は“他人に肌をさらすなどとんでもない”と言う日本の美意識でしたので、入浴時に湯帷子（ゆかたびら）と呼ばれるものを着て入浴していたそうです。

湯帷子とは、材質は麻、袖が広袖（ひろそで/現在の襦袢の袖の形と同じ）の単のきものです。

しかし、入浴法が時代と共に変化し、現在の様に湯船に漬かるようになると、入浴時ではなく、入浴後の涼をとる為に着る様になります。また、材質も麻よりも安価で出来る木綿が採れるようになり、麻から木綿へと変化しました。これが、江戸時代頃からのようです。

この様に安く木綿が手に入るようになると、一般の人達の間でこれが風俗化してきて夕方から夜にかけて着られるものと変化していき、現在に至っています。そして、呼び方も湯帷子から浴衣へと変化していったそうです。

現在の浴衣事情

現在の着方としては、夕方から夜にかけて着て頂く方がいいと思います。

ただ、今、皆さんが浴衣を着られるのは、お祭りや花火大会等に行かれる時だと思います。その場合は、夕方に現地に着く為に、お昼から着る事になる時もあるでしょう。そんな時はお昼からでも構わないと思います。

とは言え、浴衣もファッションですので、時代と共に変化していき、ことでしょうか。今年（2005年）などは、襟を付けたり、帯揚げ、帯締め、帯留めを使ったりと、より着物に近づいたスタイルになっています。こんな風に、特に浴衣は毎年流行が変化していきますので、今後は、夏の普段着として着られるようになる時代が来るかもしれませんね。

浴衣の帯

浴衣には半幅帯と呼ばれる帯を締めます。

半幅帯とは、幅 4 寸、長さ 3m40cm ~ 3m60cm の帯です。

また、半幅帯には、単（ひとえ）と小袋（こぶくろ/袋状になっています）があり、単には、正絹（しょうけん）のものとウールのものがあり、正絹のものは浴衣にしか締められません。

ウールの単（長さは少し短く、3m20cm ~ 3m40cm）と、小袋は着物にも締めて頂けます。

浴衣の種類

素材は平織り（ひらおり）の木綿 綿紹（めんろ） 綿紅梅（めんこうばい）などや、綿絞り（有松絞りや鳴海絞りが有名）や、絹紅梅（きぬこうばい）などがあります。

浴衣の着装

基本的には、肌着を着て、ウエストの細い部分には補正としてタオルなどを巻き、浴衣を着て、半幅帯を締めます。

足袋は履かずに素足で下駄を履きます。

着物と帯の組み合わせ

		フォーマル (礼服)	セミフォーマル (正装)	外出着	洒落着
着物	既婚	黒留袖 色留袖	訪問着 付け下げ 色無地	小紋など (後染めの 着物)	紬 (先染めの 着物)
	未婚	本振袖 中振袖			
帯		丸帯 袋帯 (有職模様・吉祥 模様)	袋帯 (有職模様・吉祥 模様) 洒落袋帯 (柄は自 由)	洒落袋帯 名古屋帯	紬の洒落袋 帯 紬の名古屋 帯

着物は着て行く場所や目的等によっては、着物の種類や、着物と帯の組み合わせ等に、守らなければならない決まり事があります。

この約束事が、着物を着る事の妨げになっている場合が多いようです。

しかし、これは洋服でも同様です。例えば、結婚式に普段着で行ったりはしませんよね。正装で行きますよね。

着物の正装とは、上の表のフォーマル・セミフォーマルに当たります。

着物の普段着とは、上の表の外出着・洒落着に当たります。

あとは、この組み合わせに衣替えをプラスすればいいだけです。

これも同様、洋服でも衣替えをしますよね。

そのように考えれば、そう難しい事ではないと思います。

また、フォーマルや、セミフォーマルを着る時は、結婚式の様な、相手があつての時が殆どだと思います。

こういう時に着る服装は、約束事をしっかり守らなければならないと思いますが、遊びに出掛ける時など、自分本位で楽しんで良い時は、約束事にとられる必要は必ずしもないと思います。

着物もファッションですので、洋服同様おおいに楽しんで下さい。

衣替えについては、別の頁に記載致します。

ここでは、上記の表に記載されている着物や帯がどんなものか記載致します。

黒留袖

既婚女性の第一礼装で、結婚式や披露宴で、新郎新婦の母親、仲人夫人、ミセスの親族が着用。

五つ紋付の黒地裾模様

模様が、着物の縫い目にまたがって一枚の絵になっています。この様な柄付けを絵羽模様といいます。

本来は、白地の着物と同寸の着物を二枚重ねて着ますが、現在は、表から見て2枚重ねに見えるよう、衿 袖口 振り 衽に、白地の生地を重ねて仕立てます。これを、比翼仕立てをいいます。

帯は、袋帯（有職模様 吉祥模様）を締めます。

帯揚げ・帯締めは、白が基本。金銀は入っていてもよい。

襦袢は、白。

バッグや、草履は、布製のもの

金銀の未広を忘れない事。

色留袖

模様も絵羽模様である。

紋は、五つ紋・三つ紋・一つ紋があります。

五つ紋は、黒留袖同様、第一礼装ですので、比翼仕立てになっており、帯・帯揚げ・帯締め・襦袢・バッグ・草履は、黒留袖と同様です。

親族の女性（新郎新婦の母親・仲人夫人を除く）は披露宴に着用してもよい。

三つ紋・一つ紋にすると、準礼装となり、比翼仕立てにせず、伊達衿（重ね衿）を用いて着装してもよい。

振袖

未婚女性の第一礼装。

訪問着

白生地の段階で、一度着物に仮縫い（仮絵羽）し、下絵を描きます。これを、ほどき再び一枚の反物にしてから、染めていきます。

付け下げ

反物の状態で、肩山・袖山の位置を割り出し、その位置を頂点に、着装時全ての柄が上を向くように模様を描いていきます。

ですので、基本的には絵羽模様にはなっていません。

しかし、現在は、ほとんどが裾模様は絵羽模様になっています。

色無地

無地染めの着物。

五つ紋 格式の高い礼服として

三つ紋 色留袖に準ずる

一つ紋 訪問着・付け下げ同様

主に、お子様が主役のお祝い時に母親・祖母が着用。（現在は、母親も華やかに訪問着を着用する機会が多い。）

小紋

型染めの着物

白生地 of 反物にしてから、染める。（後染め）

紬

糸の状態から染めてから、反物に織る。（先染め）

紬糸とは、真綿（糸に出来ない屑繭）を紡いで糸にしたもの。

【半衿の付け方】

演出効果が一番高い衣紋。

やはり すっきりと着こなしたいものです。

しかし、この衣紋に掛けている

半衿に皺がよりやすいのです。

ただ、この皺は、少しの気配りで解消されます。

次の頁からは、半衿の付け方を準備から

仕上げまで、7工程に分けて、34枚の

カラー写真を使って紹介しています。

(半衿は内側から付けていきます)

内側



半衿の左右両端を 1cm 程、内側に折込み波縫いをします。(ほどけない様にする為です。)



上下どちらか片側を 1cm ~ 1.5cm 内側に折込みアイロンで折癖をつけます。

中心



折癖をつけた側、そして表側に、まち針で印をつけます。(の cm は、半衿の伸縮度により変わります。)

中心

12.5cm ~ 12.8cm



中心から両サイド 12.5cm ~ 12.8cm

から外側に 9.7cm ~ 9.9cm

9.7cm ~ 9.9cm



中心（背縫い）



襦袢（内側）の衿つけにまち針で印をつけます。

中心（背縫い）

中心から両サイド 13cm

から外側に 10cm

13cm



10cm



襦袢



半衿

それぞれ を合わせて、まち針
でとめ直します。

(とめ方)

襦袢にうっているまち針を抜き、半衿にう
っているまち針でとめ直します。

(注意)

襦袢の衿付けと半衿の折山をきちんと添わ
せて下さい。



(確認)

とめ直した範囲は、左の写真の様に、半衿
が少し張っているはずです。

(襦袢の着装時、半衿に皺をよせない為
には、この状態が必要です。)



まち針をとめ直した範囲()の襦袢と半衿を、左の写真の様に、きれいに添わせて、まち針で細かくとめます。

中心より右側から行います。

からの襦袢と半衿を引き合い、きれいに添わせて、中心またその中心(2本)をまち針をとめます。





から の襦袢と半衿を引き合い、きれいに添わせて、中心またその中心をまち針でとめます。

中心 より左側も同様に、襦袢と半衿を引き合い、きれいに添わせて、まち針でとめます。



(注意)この時、 から の範囲で半衿が襦袢よりも、引きつっている場合は、半衿の張り加減を緩めます。逆に緩んでいる場合は、半衿の張り加減を強めて下さい。

この張り加減が、2 頁の に記載している長さの範囲です。

12.5cm ~ 12.8cm

9.7cm ~ 9.9cm





から半衿の端までは、平面上できちんと
添わせ、まず半衿の端を、次にその中心、
またその中心をまち針でとめます。





半衿の端から半衿の端に向かって波縫いをします。(衿つけの際を縫います。)

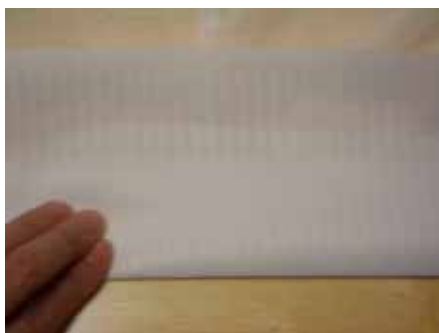
両端から (中心から両サイド 23cm) までは、1cm 位の間隔で縫います。(表は 2mm 程 裏が 1cm 程 / 目安です)

から (中心から両サイド 23cm) までは、少し細かく縫って下さい。(引き合っている襦袢と半衿が寄れない程度で大丈夫です。)

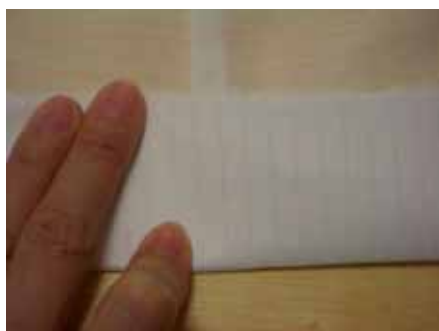


縫い始めと、縫い終わりは、縦に返し縫をするとほどけ難いです。(左の写真の一番右の糸目です。)

表側



襦袢の衿山に添わせて表側に折り返し（左の写真）、更に襦袢の衿つけに添わせて内側に折込みます。（中央の写真）



半衿の中心を襦袢の背縫いに合わせ、まち針でとめます。

次に、その両端 5cm のところを、平面上で添わせて、まち針でとめます。



中心からそれぞれ 5cm 計ったまち針の位置から衿先に向かって（中心から 23cm 位迄）まち針をとめていきます。

襦袢の衿山に添わせて外側に折り返し、襦袢の衿つけに添わせて内側へ折込み、内側から指で軽く押して、丸みをつけながら、まち針をとめていきます。





丸みをつけてまち針をうった箇所（中心から 23cm）から半衿の端までを、平面上で添わせ、まち針でとめていきます。

まず、半衿の端を、次にその中心、またその中心をまち針でとめます。





半衿の端から半衿の端に向かって波縫いを
します。(衿つけの際を縫います。)
1cm 位の間隔で縫います。(表は 2mm 程
裏が 1cm 程 / 目安です)

仕上げ



襦袢の表側、半衿を縫いつけた衿付けの部
分を、上からアイロンで押さえます。